

守山市いちに就いて

内田 秀雄

近江盆地の湖南平野、東海道の草津、中山道の守山、朝鮮人街道の永原は、ほぼ四軒を離れてならば、この地方の中心的都市又は在町である。この三つの町に中世より続くと思われる定期大市が開かれている。草津市・守山市・永原市といわれるのがそれで、ここでは守山市を中心に、その由来・現況・意義などについて考察してみたい。

一 歴史的背景

守山市しは昭和四五年七月一日市制を布いた近江湖南地方の田園小都市で、その中心は守山である(1)。

しかし、安閑天皇二年(五三五)「置芦浦屯倉」持統天皇七年(六九三)「近江国益須醴泉」同八年「諸疾病停宿益須寺」(いずれも日本書紀)などの記事により、この地方の開発の古さが知られる。この守山に、ここに延暦寺の子院、東門院守山寺が建てられた(2)。桓武天皇の勅願、延暦四年(七八五)創設を寺伝としている。日野正教編「守山村誌」(明治二十一年)に守山の始まりは、この守山寺草創に際して、家士七人をして、茶店を開かしめ、行人に助力を乞うて、守山寺修補の資を得しめ、これを「七家在家」と称したのが濫觴であるとしている。また、その家柄を自負している家がある。寺には藤原期の木造毘沙門天立像(国指定重文)木造十一面観音立像(同)・石造宝塔・宝

笹印塔（鎌倉期）などがある。近くの芦浦屯倉などの先進開発地の生産性と、東西陸上交通上の要地、更には、境川（野洲川の支流）利用の南北（湖西、湖東）舟楫の便、延暦寺の真東に当る位置などから、東門院守山寺（叡山の東門・叡山を守る―経済的に）が建立され、その門前町として始まったと思われる。或はその逆であったかも知れない。

頼朝は建久元年（一一九〇）「もる山にて狩」をしており、敵国降服の祈願で有名な西大寺の長老叡尊も弘長二年（一二二六）守山宿に泊っている⁽³⁾。最も人口に膾炙しているのは、太平記の「時雨モイタク森山ノ木下露ニ袖ヌレテ風ニ露散篠原ヤ」の句であろう。美濃路、木曾路の交通上、守山が賑われ、信長は永祿二年（一五六八）町人百姓を保護し、秀吉は文祿三年（一五九四）勢田と八幡との間の宿として守山を認めた。社会秩序の回復するとともに地方の中心地として栄えてきた⁽⁴⁾。

近世（慶長六年一六〇一）駅制の整備（中山道）により、草津に始まる中山道の最初の宿駅として重きをなして行く。寛永一九年（一六四二）の高札（東門院）も存し、本陣一、脇本陣一、問屋二も整っていた⁽⁵⁾。

このような守山に、毎年七月一二日、一二月二七日年二回の「守山市」と云われる大市が、相隣する草津（七月・一日、一二月二六日）^{ながわ}永原（七月一三日、一二月二八日）とともに引き続いて開かれている。その歴史の古さと、今日まで連続として続いている状況を紹介してみたい。

二 大市の盛況

守山大市に関する第一史料は残念ながら、発見されないが、八日市近くの小幡が享保三年（一七一八）市場再開を願ひ出ているが、許可されず寛政二年（一七九九）草津・守山・永原の例によるに、あらずとして許可されている⁽⁶⁾。

即ち冥加金を条件としている。守山などが古い楽市であることがわかる。寛政三年（一七九一）小篠原明細帳に

市場 永原村と申所に七月 十二月両度御座候 道法寺里 方角子に当り申候並守山にも右之通両度御座候 道法三十町余
方角西に当り候（傍点筆者）

とある。これは永原と守山に市場が開けて、小篠原の住民はそこで必需品を求めていることを上申しているのである。両度の意味は曖昧であるが、月毎に二回と解しておく。さきの守山村誌に「本村旧トヨリ毎年七月七日十二日十二月二十七日京阪及び本国ノ行商様々ノ物品ヲ陳列シ之ヲ鬻ク 近傍諸村ノ人民萃リテ之ヲ買フ是之ヲ守山市ト称ス本日雜沓勝テ云フベカラズ」としているのに相当する。現在は年二回であるが、村誌編集の明治二一年の時点に於いては、益は二回、暮は一回だけ催されていたことになる。

草津市は明治二五年現在、八月一日と二月二六日大市が開かれて、既に一回宛となつていたと云うから、この時分に各一回となつたと思われる。この守山市に関して、守山の隣村、今宿（守山と連続しているが、守山宿より古いと云う）の山本定四郎が「守山往来」（文久二年一八六二）を著して、守山市の詳細を記録している。当時の状況の楽しく、如何に魅力溢れるものであったか、大人小人の好奇心を満足させたかが目に見えるように、描写されている。その一部を原文のまま、読点を付して、引用する（左側は筆者註、全部かな付であるが大略する）

守山往来

湖東今宿村
山本定四郎

守山宿は湖東に当り、五畿七道の其一つ、中仙道発駅也。一国最上の繁華にて、平生にぎはう。二季に両度市をなす。当日の群集は京都四条五条辻、江戸兩國日本橋、大阪天満難波の両橋の往来も物の数ならず。まづ市町を三筋に通じ、極月二十二日二十七日七月七日と十二日を定日として、住居の商職は見世店を奇麗に飾り、諸方より寄来る商人は、（西町・横町・本町）乘空堂に並居、己が様々呼立て、其売声の轟（両道の意か）

まづ、西町の口口に、花や下種・高野嶺・蓮の葉の壞丸・冷麦・冷素麵、料理茶廊には鯛の汁・泥亀の煎・鱈汁・鍋焼・貝焼・茶碗蒸・好味物の勢揃(精進迎えの花)・観音堂の門前に、心天の砂糖入。門には蕨餅の練賣。門内には西瓜・真瓜切売。練酒・醬酎・美林酒・鯛の煎売・鯖の鮓(東門統)。(中略)

此方に松井屋七郎平、黒塗荷箱に真鍮金子、刃も奇羅く輝くばかり釣り立て、五尺八寸の居合刀を持、サア御立合の御方に御存知も御座りませう。大阪は天満天神・京都にては祇園が常見世。今日は御当所の大市。例年通り、口中の療治致す。虫喰歯の痛を止、ゆるぐ歯を居る。まづ、御駈走に、太太刀居合を一通り、御目にかけると、荷物持の男を相人にして、ふうつと刀を振廻せば、どつと集人、毎々コリヤたまらぬと、口呼び、涎流して余念無く、子供の口中差覗。コレ此子は鬼歯が有る。惣而鬼歯の妨げは喉舌に力牙サ歯音へての二つは唇の軽重とど。五音の中、カキクケサシスセ、ヤツの詞がはつきりと分れませぬ。しからば抜いて仕廻ふと思召(以下意味不明)。御素人様方が、釘貫と鉄槌とを持って裏から打ったり、こぢたり被成ても、いつかなく目のまふほど痛ばかりで、歯は抜けぬ所を、拙者が家の名方の膏薬を、斯付て、手拍子一つで歯は抜ると、云かと思へば鬼歯は転とぬけたりけり。是を不思議とみる人の、目まへ膏薬つきつけて、此膏薬の機能は、歯を抜斗の事でなし。まず、そばかす、面皰が癒る。藏風が逃る。目疔と異子がとれる。頭痛がやむ。瘡と疔が欠落する。瞞が乾く。水鼻と咳が止る。惣而腫物の痛をやわらげ、腫をちらし、疝氣・寸白が癒る。膝行が立つ。やんめ、たぐれ目。嫁娘の腹立時も一寸で忽ちなおる。サア御求め被成ませ。石腹は根付にして、血止ニなつて切疵の奇妙、万接物・持漆・銀磨の妙粉・丁字屋が匂はみがき、揚子を添へて値は六文。

時花歌の読りり、沢谷屋茂八が咄。物真似・放下・手妻・鉄輪切・見世物の数々、瀬戸物の水練・青物の細工の作物・熊の棒捻・狼の生捕・干物屋作物とは違ふ。生のものを生で見せる。猿の狂言・犬の角力・馬の曲乗・牛の軽業・猫と鼠の心中事・何を見よふと好次第。門を出ると名物の茶飯田楽、おつと入る。御上のじやぞ、合点じや、おやかた私のじや、食ゆだ。馬子私のじやぞ、心得たと、食盛女の合言葉。赤前垂に縷子の紐、ひらしやらしたる風俗。お寄りななせ、よりなせと、声ばかりに毎年(おそれ入りました)の沈香・焼香の燻売。五倍子・こせうのまじりなし。桃や林檎の安売。干見せの古道具・鋤・鍬・犁・稻扱屋。横町には皮雜履・麻の緒・扱寄地・地黄煎の切売。

本町には蒸菓子・饅頭・羊羹・砂糖類。菅笠・編笠・目せき笠。燧・火口に鉄錐。縞屋・半晒・奈良晒・帷子・上下類。团扇(虚無僧型のものか)
(近江野洲・奈良木津が有名)

の壊売。^{こぼち}日野や吉野の常器櫛、棚の中には小間物や袋物類・雪踏売。^{せまた}外には刺鯨・鯨節・小鮎・雑喉の盛斗等
(前出不明) (近江)
 扱極月の大市は土橋の上に蕪うり・午房・大根・薯蕷。西町の入口には両度心松・下種屋・齒采(穂長)・櫛(ゆすりは)
(牛皮ぞうり) (近江名産)
 と同じような大道芸人・祝繰、何でも九文・十九文や、冬物正月用品屋が挙げられている

次に近隣六三ヶ村の名物・名産(農産一五、食品一三、農具一〇、日用、家具九、衣料七、葉四など)を掲げ、西隣りの今宿の饅頭・乗物屋と、東続きの吉身の傘・花団粉・茶飯田菜・煎売・茶屋(本町のはずれの中山道で、食物やが多い)とを述べ、

守山の押懸鞆・此外・医師・鍼立・外科・按摩・算術・手跡・謡師・碁・将碁・雙六・呂律師・淨瑠璃・三味線稽古・大工・日雇・左官の輩・表具師・屏風屋・張付屋・酒屋・糍屋・醬油屋・燈油屋・蠟燭屋・質屋・雜穀屋・こえ物屋・櫛屋・籠屋・綿打屋・古手屋・糶売・小間物屋・荒物・太物・呉服物・木綿屋・足袋屋・下駄足高・塩物・青物・酢屋・餅屋・菓子屋・地黄煎屋・刺物戸障子・材木屋・刀脇差拵屋・塗師屋・接物仕立物・鍛冶屋・古金古道具・紙屑買屋・早染屋・紺屋・茶染藍染屋・豆腐・蒟蒻・酒小売・染物請取・京飛脚・在所小使・雇人・取上姥の類は所々有之、以三依怙最雇二可雇之。神子山伏修験の行者・人相墨色考者・手教八卦占者・陶焼・炭焼・白粉焼・目鑑水晶玉細工・刷毛屋・筆・結・糊置師・木地挽・轆轤師・判木彫・仏師・挽冠師・象牙・根付角細工・金銀銅の細工人・甲細工・紙漉屋・鋳屋・逢屋・光沢打屋・劍術・兵法・歌字の師・袈裟屋・衣屋の能道具・弓矢の細工・蒔絵画・金銀泥箔・金具類・遊女の輩・夜発の類・此分最も大切也。此外諸国の名物・現物の市日に来て求・遠国辺鄙の輩に爲令知・売買自由(下略)

これによると、あらゆる業種が具備して、守山が当時の生活文化の中心であったことがわかる。「遊女の輩・夜発の類・此分最も大切也」と結論している著者の常識が微笑ましく思われる。

この記事より一六年後の明治一年の統計によれば、守山今宿吉身の商業二五六戸、守山市域の商業総数は三二四戸であるから、その八一・五%がここに集中しており、残りの一八・五%が三九村に分散していることになる。大市

の守山の集中度は非常に高い。

三 大市の起原

大市の起原に関して、さきに触れておいたが、中世・近世において、諸国に活躍した近江商人の故郷には市が発達した。佐々木氏は、その本拠地の観音寺城の城下、石寺に楽市を設け、城下町の繁栄を計画し、自由商業を許した。天文一八年（一五四九）の楽市は枝村惣中に与えた佐々木六角定頼の執達状によると、わが国最初のものと考えられている⁽⁹⁾。これとは、やや後れるが信長も安土入城以前に永禄一年（一五六八）守山の町人百姓に制状を与えて秩序を回復しているが、楽市を許したかどうか明らかでない。元龜三年（一五七二）守山の隣村、金森^{かねがき}に楽市・楽座を許している。これは金森において信長に抵抗した本願寺門徒に一種の恩恵を施したのであると云われている。

また、おなじ元龜三年の記録で守山に商店が多く⁽¹⁰⁾、守山が例外的市であったことから楽市の存在を考えたい。かくの如く、中世末より近世にかけて、「惣」と云われる村落自治組織の速く進んで民度の高かった近江⁽¹¹⁾には、これらの民衆の需要に応ずるため各地に多くの市が開かれていた⁽¹²⁾。「滋賀県史」、「滋賀県の歴史」によれば

滋賀郡 真野 粟津

栗太郎 草津

野洲郡 篠原 守山 金森 永原

蒲生郡 馬淵 石寺 日野 横関 島郷 小脇

神崎郡 八日市 小幡

愛知郡 愛知川南宿 長野 出路 枝

犬上郡 甲良 四十九院 高宮 尾生
 坂田郡 箕浦 平方
 伊香郡 伊香具
 高島郡 今津 南

。 楽市（自由市場）
 | 現在もある

などがそれであるが、その多くは蒲生・神崎・愛知・犬上の所謂「中郡」の中山道縁辺地域の中心集落で、明らかにほぼ等距離に分布している（図1）。



図1 近世初期「市」分布図
 —滋賀県史などより作成—

このうち、草津は東海道の太宿駅であり、守山は中山道の最初の宿駅である。永原は中世以来の永原氏の城下町（城とはやや離れている）であり、朝鮮人街道の要地であった。現在、草津・守山は市制を布いているが、永原は今全くの在町である。しかし永原は家棟川（有名な天井川）を境として、富波と連続しているが、富波は今日でも煙草屋以外は店のない純農村である。永原はこれに反して商店多く、料理店まで揃っている。このような、歴

史を背景に、野洲川の形成した湖南平野の山麓線に近く、略等距離の中心商業都市が発生して、伝統ある中世的「市場」を今日まで持続しているのである。永原と守山との間に中山道野洲川渡渉の双子町として野洲が発達し、天文年間（一五四五）市が開かれ天正一九年（一五九一）まですくなくとも続いた（12）。隣接の「市三宅」はその市に関係するかとも思われるが宿駅とならなかった故か、その後市の開催には至らなかった。戦前、永原市を野洲市として代

替せんとする動きがあったが成功しなかった。

四 大市の現況

昭和四七年八月二日、守山市の実態調査を試みて、次のような結果を得た。往時の盛況はみられなかったが、伝統の強きに考えさせられるものがあった(図2)。

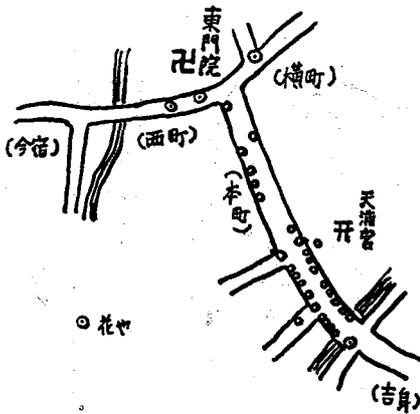


図2 守山市出見世
—昭和47年8月12日—

同類の所に店を出す。関係のないものは、神社天満宮その他銀行などの関係のない所に場所を決める。

一、守山には全国露店商組合の実力者で、第一回参議員選挙に出馬(当選はしなかった)した梅原富蔵がいたが、その後継者(井村陸奥次氏)に挨拶するだけで、出店に關しては、何の制約も、強制も、約束も、命令もなく、従って市・商工会後援と云

- 一、本町は道幅が横町西町吉身の二倍になっている。大市のためである。
- 一、出店数は三二名であった。地元の商店も大売出しをする。
- 一、玩具などの子供用品が一番多かったが、切花(仏花)が之に次ぐ(写真1・2)。
- 一、連続数十年に亘って来ているのが多く、中には親の代から来ているので、百年近くなると云うのもあった。これは驚くべきことである。
- 一、三二名中三一名が定期的に市場・縁日巡りをしているとのことである。
- 一、往時の如く雑踏しないので、面白い香具師や大道芸人(そんなのは無くなったが)はみられなかった。
- 一、県内の業者が二三、県外が九であり、商品は殆んどが自家用車で運んでいた。
- 一、出店の場所は一定不変である。何となしに決っている。地元の商店と

商 品 調

った援助も、支援も、徳源もなにもない。楽市・楽座の伝統のみをたよって「自由に」ただ何となく集って、店を出すのであった。これも驚く可きことである。他者にたよると云う乞食根性は全く無く、そんな考え方以前からの自由市であった。だから前触れも宣伝も一切しない。地域住民に定着しきっているのである。

一、道行く人に来市の目的をきくと異口同音に「花買いに」との返事がかえってきた。

*高野槇、二米位のもの（寺院用二、〇〇〇円位）から小枝まで。馬酔木、これが多い。蓮華。守山市の寺院一五二（町教五二）真宗九二。真宗はこの槇を仏花とするのが原則。



写真 1 花屋 竹柱の右に高野槇、左に馬酔木がみえる

—昭和47年 8 月 12 日—



写真 2 馬酔木を物色している

—昭和47年 8 月 12 日—

年数	人数
50	1
30	3
28	1
25	2
20	4
18	1
15	4
10	11
8	2
5	1

来市年数調

滋賀県内	長 浜	6
	能 登 川	5
	彦 根	3
	守 山	3
	近 江 八 幡	2
	草 津	2
	水 口	1
	甲 西	1
	京 都	2
	天 理	2

他府県

三 重 県	2
大 阪	1
名 古 屋	1
神 戸	1
計	32

出身地調

玩 具	8
切 花*	4
金 魚	2
花 火	2
綿 が し	2
スマートボール	2
は き 物	2
た こ 焼	2
りんごあめ	1
瀬 戸 物	1
掛 軸	1
アクセサリー	1
傘	1
風 船	1
物 指	1
甘 栗	1
計	32

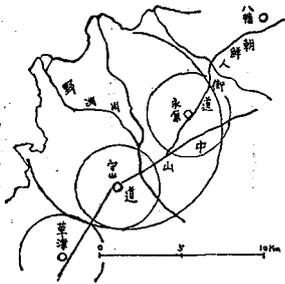


図3 守山の商圈 (大圏商圈直径12km, 小圏直径5km)
一「守山町都市計画説明書」(1958)により作成一

五 大市の意義

しかし、この市を可能ならしめている理由は、先ず、市の商圈がかなり広いことである。「守山町都市計画説明書」(昭和三三年、町村合併促進法により、合併後、町が計画したも

の)によると、守山商店の商圈は、その外縁は野村・江頭・大篠原・小篠原・南桜・霊仙寺、半径約六料人口八万を包含している。(図3)しかし、これは必須の条件ではない。この中世的な大市が、今尚続行せられている理由は簡単である。それは守山市(草津市・永原市も同様であるが)、でなければ、得られぬものがあるからである。その市独自の商品とは何か。それは他でもない、「守山往来」にも、先ず

仕入先調

*掛軸

運搬調

名古屋	4
東京	3
奈良	3
彦根	1
水口	1
長浜	1
福島*	1
岐阜	1
愛知	1
全国各地	3

自動車	30
鉄道	1
その他	1

最初にあげている花類である。「七月にはまづ西町の口々に花や下種・高野槇・蓮の葉の壊売」「極月の大市は、西町の入口には両度・心松・下種屋・歯朶」とあるのがそれで、これは、盆・暮に必ず用いる仏花である。盆は高野槇、暮は姫小松であるが、仏壇又は墓場に供えるものである。下種は馬酔木である。この花屋が東門院の門前町の西町に限られて、先づ最初に述べられていることに注意を要する。このことは、この市の起原を示唆している。「ちよっと花買いに行く」が市に行く人の合言葉である。守山市の目玉商品である。花屋は別図(図2)の如く数百年昔も、今も同じように、門前に店を構えている。伝統に生きる農村人の姿が、ここにある。考えてみると恐ろしい程の定着である。

近江盆地は我が国での宗教地域で、比叡山の影響もあつたが、本願寺の存如・蓮如・実如・証如・顯如・教如なかでも蓮如(八代)・顯如(一一代)・教如(二二代)が教線を張つたので、殆んど全土を挙げて本願寺の門徒となつて、どの村(集落)も必ず数個の寺院を擁する真宗地域である¹³⁾。従つて、教化は徹底して、仏教儀礼は甚だ丁重である。仏壇は農民の「三重宝」(仏壇・戸棚・牛)の一つとせられ、仏壇もその本来の意義が堅く守られて、仏壇は先祖の位牌をおく所でなく、如来を祀る所となつている。豪華な仏壇は家の誇りである。彦根仏壇町が成立している所以である。べ繩や門松の如き、古い民俗的行事は、雑行雑修(仏道と関係なくむしろ邪魔になる)として教義の性質上、きらわれ、一切廃止した。それだから、何をさしおいても、仏壇のお飾りをしなければ、盆・暮が越せぬことになる。夏には、それに祖霊が乗つて、帰つてくると云われる(京都の珍皇寺の行事の影響)高野槇、冬は門松にあやかつて、仏壇にふさわしい姫小松が、「仏花」として必要になる。盆暮の節季に里帰りの縁者は、「仏様に御礼」と云つて、帰ってくるので、いやでも、義理でも、花を供えておかねばならぬ。このあたりはそんな地域であ

る。この宗教力が花市を今日までささえ、存続せしめている有力な原因であると考える。

なお更に、これを可能ならしめているものは、高野嶺、馬酔木・姫小松などの供給地が近くに存在することである。湖南地域甲賀郡は古琵琶湖層の洪積台地、花崗岩地域で、比較的雨量も少なく一種の禿山で、雑木林が多く、最近の燃料革命以前は沖積地域の農民の冬季農閑期の灌木林薪刈場であった。高野嶺・馬酔木・姫小松の無尽の供給地である。新鮮を要求する花市であるため、甲賀郡周辺の草津・守山・永原にのみ、この市を今日まで可能にしたとも云えるであらう。

守山市聞書き

○大正の中頃でしょうか、八軒の道をとぼとぼはお、かれは、うし（頬被帽子）で歩いて、天秤棒の先に空の一斗樽をつけて、一方には石をぶらさげて、大売出しの醬油を買ったものです。裏町（横町）の「お光」（うどん屋）で、一杯やるのが楽しみでした。

○生姜の砂糖煮が紙袋に入れて並べてあるので買って帰ると、袋はふくれているが、中には二三片しか生姜は入っていません。空気を買われました。

○暮の大手では吉身のあたりに植木・苗木（名古屋稲沢）が出ますので、日の暮れ頃に値切って買うのが楽しみでした。温州蜜柑・金柑などです。値切って、折れ合はなかったのですが、明るる日、どうして知ったのか、名前も明かしておかなかったのに、玉つげの苗を六〇程も持ち込んで来たのには驚きました。同時に商売熱心に打たれて買いました。

○父につれられて七軒の道を歩いて行きました。魚末（料理や）の二階で混雑した座敷で茶碗蒸を喰べたことを覚えています。父がいつまでも酒を呑んでいるのに閉口しました。その時わたしが持って帰った「でしお」（紅い枝に紅い若芽の楓）がこんなに太くなりました。直径二〇釐はあります。もう六〇年も前のことです。

○一月一六日の木辺さん（真宗木辺派本山）の御七晝夜、春秋の高野の善光寺のお彼岸、赤野井御坊（本願寺別院）の十月の

報恩講、盆暮の守山市がお参りはともかくとして、この辺の年中行事で行かねば話になりませんので、仲間をさそって歩いて行きました。遠い高野でも人の行列でした。だまされたり損をした話が当分続きました。今はもう守山市だけになりました。しかし、花も村でも売っていますので、守山まで行かなくても、よいようになりました。

註

- (1) 昭和四七年八月一日、人口三七、八六六
 (2) 滋賀県史(昭和三年)第二卷 一六〇頁
 (3) 野洲郡史(昭和二年)上卷 一八三頁
 (4) 前掲 下卷 四六六頁
 (5) 滋賀県史 第三卷 五九三―四頁
 守山宿園(守山下村稔氏蔵)
 (6) 滋賀県史 第三卷 六二七頁
 (7) 滋賀県市町村沿革史(昭和三五年)三四三頁
 (8) 滋賀県史 第三卷 二二〇頁
 佐々木銀弥 中世都市と商品流通 日本歴史 中世4(一九六三)一五一頁
 (9) 滋賀県史 第三卷 四六八頁
 野洲郡史 上卷 三九六―三九七頁 下卷 五〇〇頁
 (10) 石田善人 惣について 史林三八卷六号 六七頁以下
 (11) 滋賀県史 第三卷 一九七頁以下 原田敏丸 渡辺守順 滋賀県の歴史(昭和四七年)一二〇頁
 (12) 滋賀県史 第三卷 二一八頁 四六八頁
 (13) 内田秀雄 日本の宗教的風土と国土観(昭和四六年)(昭和四七年九月五日稿)